

企画にあたって

波多 聰¹ 廣澤 渉² 村上 恭和³ 井 誠一郎⁴ 萩原 幸司⁵
中川 恵友⁶ 池田 賢一⁷ 松田 光弘⁸ 宮野 公樹⁹ 塗 溶¹⁰

一部の大学で秋入学制度の検討が始まるなど、日本の研究教育システムは優秀な人材の獲得競争に対応すべく、グローバル化に拍車をかけている。こうした動きは、日本で学び活躍する外国人の増加をもたらすだけでなく、減少傾向にあると言われてきた日本人海外留学生を再び増加に転じさせる可能性も秘めている。このようなグローバル化の新時代に臨む我々は、材料科学の担い手としてこれをどう受け止めて、どのように日本の材料分野の発展へと繋げてゆけるだろうか。

本特集では、この問題を考える切り口の一つとして、若手研究者からみた日本と海外での研究教育環境の違い、海外での材料研究の位置づけや戦略、人材獲得や国際化教育に向けた国内外での取り組み等に関わる報告や提言を揃え、材料分野をとりまく環境と現状を客観視する機会を読者に提供する。グローバル化というキーワードを意識して、おもに海外で活躍する日本人や海外経験の長い研究者に寄稿を依頼した。

ドイツ留学中の森田孝治氏(物質・材料研究機構)には、同国の大学における研究教育現場、教育システム及び雇用制度の現状と改革の動き、若手研究者が海外留学することの意義等について執筆いただいた。自身の研究成果以外にも、多くのことを経験・吸収し、素晴らしい留学の成果を挙げておられることが読み取れる。

米国の大手企業に籍を置く鈴木 茜氏(General Electric Company)には、企業利益を最大化するための生産法や研究開発、求められている人材、海外企業で働くメリット・デメリット、日本の大学教育研究の強みと弱み等について執筆いただいた。グローバルが根付いている米国の企業風土と、そこで奮闘する鈴木氏の様子が読み取れる。

米国の大学で教鞭をとる村山光宏氏(バージニア工科大学)

には、同国の構造材料系国家プロジェクトの状況、同プロジェクトの構想に影響を及ぼす社会的・国際的事情、世代に応じた海外留学の意義の違い、グローバル化する材料研究の分野で日本が存在感を発揮するために必要なこと等について執筆いただいた。村山氏の文章には、米国のみならず、日本の政府系大型研究プロジェクトの構想の源が見え隠れしているように思えることから、中堅・ベテラン研究者にも必読の内容といえる。

欧州で博士課程学生から正規研究職員までを経験されている奥野華子氏(フランス原子力エネルギー庁)には、グローバル化時代の研究者に求められる自立性ならびに他者との連携力の両立、研究者の職場環境における日仏間の比較等について執筆いただいた。日本人であることを武器にして、海外に研究活動拠点を獲得した奥野氏の文章には、特に女性研究者は勇気づけられるであろう。

日本、英国およびドイツでの教育・研究経験をもつ Victoria Yardley 氏 (Ruhr-Universität Bochum) には、各国間の教育システムの違いを執筆いただいた。Yardley 氏自らが執筆された日本語の文章には、日本で材料科学を学んだことへの敬意が感じられる。

日本の大学で教鞭をとる史 蹟氏(東京工業大学)には、豊富な統計情報を基に、日本での留学生を取り巻く環境の変遷と、優秀な留学生や研究者を日本に招くために重要な点等を執筆いただいた。留学生として日本を訪れ、最終的に日本の教授職に就いた史氏の言葉には説得力があり、海外留学生には必読の記事であろう。

これらの執筆記事から、2つのことが見えてくる。まず、

¹九州大学大学院総合理工学研究院；准教授(〒816-8580 春日市春日公園6-1)

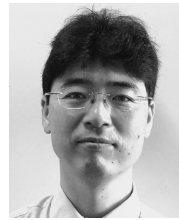
²横浜国立大学大学院工学研究院；准教授、³東北大学多元物質科学研究所；准教授、⁴物質・材料研究機構元素戦略材料センター；主任研究員、⁵大阪大学大学院工学研究科；准教授、⁶岡山理科大学工学部；准教授、⁷九州大学大学院総合理工学研究院；助教、⁸熊本大学大学院自然科学研究科；助教、⁹京都大学学際融合教育研究推進センター；准教授、¹⁰東北大学金属材料研究所；准教授

Preface to the Special Issue on Young Researchers' Comments on Globalization in Research and Education of Materials Science in Japan; ¹Satoshi Hata, ²Shoichi Hirose, ³Yasukazu Murakami, ⁴Seiichi Ii, ⁵Koji Hagihara, ⁶Keiyu Nakagawa, ⁷Ken-ichi Ikeda, ⁸Mitsuhiko Matsuda, ⁹Naoki Miyano, ¹⁰Rong Tu (¹Kyushu University, ²Yokohama National University, ³Tohoku University, ⁴National Institute for Materials Science, ⁵Osaka University, ⁶Okayama University of Science, ⁷Kyushu University, ⁸Kyoto University, ⁹Kumamoto University, ¹⁰Tohoku University)

Keywords: globalization, research, education, materials science, Japan

2012年9月11日受理

海外の留学生や研究者を受け入れる側として、日本は教育研究のグローバル化を勝ち抜けるだけの魅力を有する国であり、その魅力を世界の中で如何にアピールしていくかが今後の行方を左右するということが指摘される。次に、海外に活躍の場を求めていく研究者として、日本人の気質と、日本の教育を受けた経験を自ら過小評価することなく、積極的に教育研究活動に活かすことが必要ではないかと考えられる。



波多 聡

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★
1994年 九州大学大学院総合理工学研究科修士課程
修了
同年より同大学助手
2007年4月— 現職
専門分野：電子顕微鏡、規則—不規則変態
◎電子顕微鏡および金属・無機材料の微細組織に関する
教育研究に従事。
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★



廣澤渉一 村上恭和 井 誠一郎 萩原幸司 中川恵友 池田賢一 松田光弘 宮野公樹 塗 溶